時代小説が好きだ

大平　忠

学生時代は、吉川英治以外時代小説を読んだ記憶がない。会社へ入って二年目の昭和三十八年、本屋の親父の甘言に乗って『山本周五郎全集』十三巻を予約してしまった。当時は仕事が忙しく土日もなかった。毎晩独身寮に帰るのは十二時前後。ところが、第一巻を読み始めると惹きこまれてしまい、寝る時間も忘れてしまった。これでは体を壊すと、翌日からは二時までと決めて読んだ。この全集は一月に一巻の配本だったから、約一年間山本周五郎に明け暮れたのだった。

その後、司馬遼太郎の本が出始め、東京へ転勤後はもっぱら通勤時間と土日で読んだ。やがて藤沢周平に嵌り、出張の時に東京駅駅中の本屋で買って汽車の中で読んだ。急いで買うので読み出すと以前読んだ本だと気がつくこともあった。

最近は、『蜩の記』で名高い本格派の葉室麟が四年前に亡くなってしまい寂しくなった。いま読んでいる作家は、次の三人である。いずれも本屋でパラパラとめくりこれは面白そうだと見当をつけて読み始め、以来読み続けている作家である。三人ともシリーズもので、十巻以上長く続いており、いつ終わるのか分からない。

高田郁（かおる）は、『みおつくし料理帖』から始まって『あきない世伝』が目下十二巻目。女流作家らしく季節感溢れる描写が楽しい。

金子成人（なると）は、『付き添い屋六平太』が十四巻目。いま時代小説では「〇〇屋」と名のつく表題が多いが、はしりの作家である。向田邦子原作の脚本で腕を磨いた作者だ。

岡本さとるは、『居酒屋お夏』が十三巻目。池波正太郎原作のドラマ化の脚本家として名前を知っていた。居酒屋の女将の知られざる助っ人稼業が面白い。

山本周五郎から始まってこれら三人の作品も、すぐ手に取れるベッドの脇の本棚に置き、寝る前に布団の中で読んでいる。困るのは、毎晩続けて読んでいないと、筋が分からなくなる。やはり記憶力が衰えたのだろう。とはいえ時代小説の魅力は尽きない。

余生の楽しみの一つである。

（令和三年十二月九日）